城東の荘に宴す

崔敏童

一年始めて一年の春有り　百歳曾て百歳の人無し

能く花前に向って幾回か醉わん　十千酒を沽うて貧を辞すること莫れ

【作者】崔敏童（生没不詳）盛唐（六一八年から九〇四年までの唐代のうち、玄宗皇帝即位の七一二年頃から約六十年間をいいます）の詩人。山東省（中国東部、渤海と黄海に面した遼東半島のあたり）の人です。『全唐詩』にこの一首だけ載っています。

【語釈】＊城東荘…これは自分の従兄の崔景童（さいけいどう）が王維の〔車罔〕川（もうせん）荘の対岸に建てた別荘で長安の東郊にあった玉山草堂。

＊百歳…人の寿命の上限をいう。　＊十千…一万銭。　＊沽酒…酒を買うこと。

【通釈】一年が終われば新しい年の春がおとずれてくる。春はこのように永遠にめぐってくるが、こうして百年をかさねても、百歳まで生きる人はひとりもいない。このように、咲く花の前で、互いに酒を飲んで、いったい一生のうちに何度酔うことができるだろうか（そう度度はあるまい、今日一日は存分に飲もう）一万銭で酒を買ってこいよ。金がないとか、金がなくなるとか、さもしいことを いうものではない。

【解説】城東の荘は、長安城の東の郊外にあった別荘のことです。この別荘は作者の弟の崔敬童の別荘でした。作者はその別荘で宴を開き、その席上で詩を作りました。その詩が『城東の荘に宴す』です。弟・崔敏童は、玄宗皇帝の皇女を妻としました。